大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

図 43

はじめに

『大地讃頌』という合唱曲がある。7楽章からなる『土の歌』(大木惇夫作詞、佐藤眞作曲)の終曲で、「大地を愛せよ　大地に生きる　人の子ら　人の子　その立つ土に感謝せよ」と歌っている。いったい誰の視点なのかよくわからない歌詞ではあるが、小学生の時に歌わされて以来、私はこの歌が好きだ。なんともいえない高尚さと、大人のかっこよさを感じ、意味はよくわからないけど、きっとすごいことを歌っているんだろうとおもっていた(ちなみに『土の歌』は、第4楽章の『もぐらもち』もなかなかの代物なので、未聴の方はぜひ聴いてほしい)。

さて図 43 は、前回の報告で突き固めた版築ブロックを脱枠したものだが、きっと誰もが『大地讃頌』を口ずさまずにはいられないだろう。ため息の出る美しさである。茶色のなかにこれだけのバリエーションがあるのかと驚かされる。まるで森を見ているようで、目がよくなりそうな気さえしてくる。この中にスピーカーを仕込んで『大地讃頌』を流したい。音は控えめに、近くで耳をすまさないと聞こえないくらいの音量がいいだろう。今度、やってみよう。

出来上がったものだけを見ると、セメントブロックのような重量感があるが、原料は石灰石や貝殻から採れる石灰と、そこらへんにある土だけで、それをただ突き固めただけの、天然のブロックである。このまま土に還すこともできる。超高温で工業的に焼成され、自然の環境から孤立した「セメント」とは似て非なるものだ。

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

ただ、写真でもわかると思うけれど、下層のほうがすこしもろくなってしまっている。これは材料を練る時に、土のダマを崩しきれていなかったことが原因と思われる。とはいえ出来上がったブロックはすでに建材として十分な強度をもっているし、これで《勉強堂》を作ってしまってもいいと思うのだけど、本報告書でもたびたび登場している、建築家の遠野未来さんによると、これに砂利や砂を加えればさらなる強度が見込めるという。加えて、現場の土だけで 3m×3m の小屋の壁をまかなうだけの量を得るのは、作業量的にきついものがあるので、砂と砂利の追加は「かさ増し」にもなる。

四種のテストピース制作

ということで、砂と砂利を加えたテストピースを作ってみることにした。それにあたり、どのような比率で加えるかということが問題になるのだが、そこは遠野さんが提案してくれた以下の重量比に従った。

1　現場土のみ
2　現場土:砂(中目または荒目):骨材(5〜20mm)を、1:1:0.4
3　2に加え、消石灰5%
4　2に加え、消石灰10%

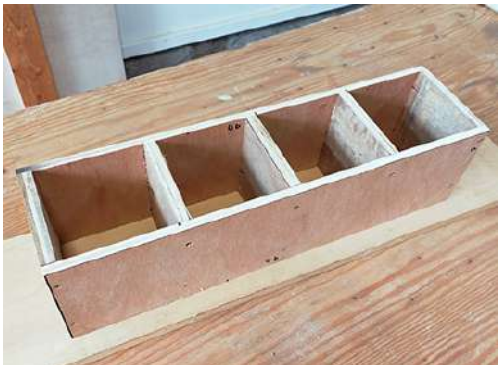

図 44

図 45

まずは、4つの版築ピースを成形するための型枠を作る。材料は、前回使った型枠(12mm の合板)を、丸ノコで切って組み立てた。これで 10cm 角のブロックが 4 つできる(図 44)。これに材料を入れるわけだけど、その前に、つい最近届いた「新型ロータシープ(回転式古土分別器)」(9,000 円)を使って、土のダマを崩した(図 45)。

上に土を入れて、ドラえもんの鼻みたいな赤い玉を回すと、バーが回転して金網に土が押し付けられ、細かくなったものが下からでてくるという仕組み。簡単な作りだが、一つ一つ手で潰すよりもはるかに効率がよい。なにが新型なのかはわからないが。

こうして砕いた土に、なにも加えないもの(図 46)、ホームセンターで買った中目の砂と川砂利(5〜15mm くらい)を 1:1:0/4 で混ぜたもの(図 47)、そこに消石灰を 5%加えたもの、そこへさらに消石灰 5%を加えたもの(図 48)の四種を用意し、それぞれの型枠 4cm ほど入れて、それが 2.5cm 程度に圧縮されるまで突き固めた(図 49)(使った材料の合計は土 1.9kg、砂 1.9kg、川砂利 0.4kg、消石灰 260g)。

砂が入ったことで、今までに作った版築ブロックとはかなり違う感触の「生地」ができた。砂が多すぎるのではないかと不安になるが、とにかくいったんやってみる。なにごとも一度やってみるのが大事だ(いつもこんなことばかり言っている気がする。効率は悪い。だがそれでよい)。

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

図 46

図 47

図 48

図 49

図 50

突き終えたものが図 50 である。一番左が土のみで、一番右が消石灰 10%のもの。グラデーションになっていて、なんだかおいしそうだった。これを、前回同様に固まるまで数日間放置する。

数えてみれば今回のものを含めると、これまで8個もテストピースを作っている。いったいどれだけ作るつもりなのか。はやく現場に行って作業を始めたい気持ちもあるのだけれど、一人でやっているのでのんびりしてしまっているところがある。一人だと急ぐのが難しい。だけど、これについてはまたあとで書くかもしれないけれど、最近はこの「遅さ」も大事なのではないかと思い始めた。

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

＜ひといきコーナー＞

もう冬になってしまった。甲州街道にはまだケヤキの落ち葉が道端で山のようになっているが、その季節ももうじき終わる。

10 月から、《勉強堂》で使う暖房の材料確保のため、昨年もやったように、甲州街道沿いに点々と集められている「国土交通省の落ち葉収集袋」(ケヤキの落ち葉が詰まっている)をすこしずつアトリエに持ち帰っているのだが、ある日、その袋を三つほど自転車にぶら下げながら甲州街道をチリチリと歩き、酒屋の前を通り過ぎたときにタバコが切れていることを思い出して、自転車を路上に停め、酒屋に入ってタバコを買おうと思ったら、店のおばちゃんから

「畑をやってるんですか？」

と聞かれた。袋を集めているところを見られていたのだ。「そうなんですよ！」と答えたら、「どこですか？三鷹？近く？」と聞かれたので、「すぐ近くです、そこを左に曲がって脇道に入った…」などと説明していたら、「ああ！あの八木さんの左のところね！」と、おばちゃんのなかで繋がったらしい。

「あの袋、吸い殻とかも入っちゃってるかもしれないけど…」

「まあ、米ぬかとか入れて発酵させて、腐葉土にしてるんで、あのまま使ってはいないです」

「そうじゃないと無理よねえ」

自分は今まで、あの袋の落ち葉たちは、役所が委託した業者が集めているものだと思っていたのだが、「もしかして、街道沿いにいる市民が自分たちで集めているのか」と聞いたら、「そうなんです、店をやってると落ち葉がみっともないから、国交省からもらった袋で集めてて、道に置いておいたら回収してくれるんだけど、それがなかなか来ないことも多くて」とおばちゃんが教えてくれた。知らなかった。

「だから、空になった袋だけそのへんに置いておいてもらったら、また使えるから」

と言ってくれたので、これは＜おばちゃんが落ち葉集める→村上が回収。袋だけ返す→おばちゃん再び落ち葉を集める→(以下繰り返し)＞というサイクルができるのではないかと思い、「じゃあ！中身だけあけたら袋返しにきます！」と言っておばちゃんと別れた。

早速アトリエで、すでに集めていた袋の中身を三つ、別の 70L ビニール袋にうつし、折りたたんで酒屋に届けた。

「落ち葉のほかに、いろいろ入ってなかったですか？」

「まあ、タバコの空箱とかは入ってますね」

「そこの喫煙所(この店は、駐車場の一部を喫煙所として開放している、すばらしい店なのである)の掃除をしてると、入っちゃうんですよお」

「まあ、でも全然」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「また取りに来ていいですか？」

「え？」

「また、落ち葉取りに来ていいですか？」

「ああ、どうぞ。置いときますので」

こうして落ち葉がメディアになり、酒屋のおばちゃんとひとときの会話が実現した。よい。

発電所の制作一日目

さて、テストピースの件はいったん置いて、前回の草刈りで必要性を痛感した倉庫を、今回ついに作ることにしたというのが、本報告書の主題である。ソーラー発電所を兼ねた倉庫である。

11 月 16 日、私はその壁にするための資材を調達すべく、近所のホームセンターで針葉樹合板を買おうとしたのだが、なんと一枚 2,600円だった。針葉樹合板といえば 1400 円くらいで買えるイメージだったのに、ここ数年のウッドショックで倍くらいの金額になっている。

うろうろ考えた末、合板は買わずに、アトリエ(図 51)に大量にある角材を並べて壁にすることにした。

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

図 51（私もシェアで借りている都内のアトリエには、メンバーの制作で余った角材のストックがある）

11 月 18 日、工具とソーラーパネルと大量の角材を車に積んで現場へ。前回同様なんだかんだ準備に手こずり、出発するのが 11 時半過ぎになってしまい、現場に着いたのは 14 時半過ぎだった。着いた時にはもう日が傾いていた。

まずは車の角材をおろし、倉庫兼発電所をどこにつくるか考える。陰になる時間がなるべく少ないように、隣の家と裏山から距離をとりつつ、かつ道路に面した間口付近を避けるようにして、敷地北端の中央あたりに設置することにした。

段ボールに、クレイジーにてきとうな設計図を描いて（図 52）、柱は 2×4 材（名古屋のプロジェクトの使い回し）で、その足元に「羽子板付沓石」（簡単な基礎として便利なのでおすすめ）を地中に埋めてボルトで固定することにした（わかりにくいけど図 52 の右側）。

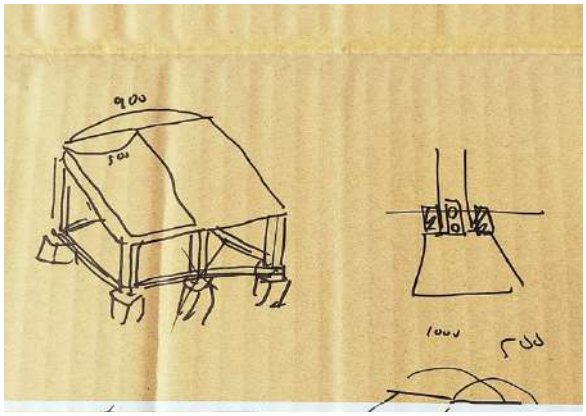

図 52

屋根にはサブロク（約180cm×90cm）の合板を一枚買って、まるごと使うことにした。

近所のコメリへ行き、羽子板付沓石を四つとボルト4セットと塗装合板を買った。会計 6500 円くらい。

現場に戻って GoPro のタイムラプスをセットし、羽子板付沓石を埋めるための穴を掘り始める（図 53）。

図 53

ひと穴掘り終えて、ふたつ目に着手したときにはもう 16 時半になっていた。暗くなってきたので作業は明日に持ち越し、風呂に行くことに。前回も使った「クリーンセンター入浴施設」に予約電話をかけ、「十八時からしか空いてません」と言われ、十八時に風呂に行くことが決定した。

夕方5時の時点で、すでに現場はほぼ真っ暗になった。50 メートルくらい先にある舗装道路にしか、外灯がないのである。おまけに静かで、虫もほとんど鳴いていなかった。遠くの駅の、電車の発車ベルが嘘みたいにくっきりと聞こえた。

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

クリーンセンター入浴施設にて

前回作ってもらった「利用者カード」を受付で提示すると、前回と同じように受付のおじさんが「県外だから八百円になっちゃうんだけど…」と、申し訳なさそうに言った。

「大丈夫です」と答えると、「東金(この施設は東金市という街にある)はなんか、勤めとかないんですか？」と、また前回と同じように聞いてくれたので、「勤めとかはないんですよね、買った土地に通って、いろいろやってるだけなんで」と、同じように答えた。

「八百円だよね。高いよね」

「ははは。でも、助かってますよ」

「そうですか。では、かごを持ってそちらにどうぞ…」

受付脇にあるかごを取って、脱衣所に行き、洗い場でかるく体を流してから露天風呂へ入る。他に洗い場に一人、露天風呂に一人、客がいた。

風呂から上がって体を洗っていたら、洗い場にいた、体の大きな、背中と両腕にドラゴンだか鯉だかの刺青を入れたおじさんがシャワーの前から立ち上がり、露天風呂の扉のほうへ行き、風呂に浸かっていた男性に向かって、かるく威圧するような調子でこう言った。

「にいちゃんよお、ここ閉めてくんねえとよ。寒いからよお」

露天風呂のドアが開いたままになっていたのである。ちなみにこのドアは、私が入った時からずっと開いたままだったので、コロナ対策で換気しているのかなと思い、私も閉めなかった。

おもしろい(と言っていいのかわからないが)のはそこからで、男性は謝るのかと思いきや、刺青のおじさんに向かって「ずっと開いてたじゃないですか！」と、逆ギレした。

おじさんは「いや、寒いからよお。閉めてくれよ」とまた同じことを言ったのだが、すると男性はもっと大きな声で、

「おかしいなあ！ずっと開けてたじゃないですか！これまで何度も、何度も、ご一緒しましたよね！でもずっと開けてましたよね！コロナ対策だから開けてんのかなあって思ってたんですけど！」

と言った、というかほとんど叫んでいた。

「え、そうかよ。でも寒いからよ…」

「ああ！じゃあこれからは閉めればいいんですね！わかりました！」

ドアはぴしゃりと閉められた。私はひやひやしつつも、ちょっと笑っていた。男性がヒステリックで、おもしろかったのである。だけど本当に喧嘩になるのは嫌なので、刺青のおじさんが「なんだとこの野郎！」とならなくてよかった、引き下がってくれてよかったと思った。

しかしこれで終わりではなかった。数秒後、露天風呂の方からまた、

「おかしいなあ！！」

と叫ぶ声がした(ここでまた笑ってしまった)。男性は勢いよくドアを開け、

「コロナ対策だと思ってたんですけどね！もういいんですね！コロナ明けたから！もう、閉めますよ！」

とわめきながら洗い場に入ってきた。刺青のおじさんは「そうかい」とつぶやいた。

しばらく二人は、二つぶん離れたシャワーの前に座り、無言で体を洗っていた。私も体を洗っていたのだが、ぜんぜん集中できなかった。他にいる人間は僕だけなので、なにか場をとりもつようなことを言ったほうがいいのか、考えてしまった。

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

つらい沈黙だったが、やがて刺青のおじさんが口を開いた。

「おれが夏のあいだドア開けてるの、よく知ってんなあ」

すると男性が、「なに言ってるんですか」と言わんばかりに、はっはっはと笑って、

「いままで、何回もここで一緒になったじゃないですか！時間まで一緒！」

と言った。それから二人は仲良く話しはじめた。さっきまで口論していたのが嘘のようだった。

「喧嘩したあとって、仲良くなれるよねえ」と私は思った。

私は体を拭いて「お先です～」と挨拶し、風呂場を出た。刺青のおじさんが「あ、どうも～」と返してくれた。

ロビーに戻ると、男が一人ソファに座っていた。誰かを待っているようだった。自販機でコーヒー牛乳を買って飲んでいたら、4 人くらいの家族連れが女湯から戻ってきて男性と合流し、「露天風呂で、すっごい喧嘩してなかった？」と聞いた。

「え、まだやってんの？」

どうやら風呂場での口論を、この男性は脱衣所で聞いていたらしい。

「ドア閉めろだの、なんだのって、すっごい大きな声でさ」

私は思わず「もう仲なおりしてました」と会話に参加した。「仲なおり」という言葉を久しぶりに使ったと思った。

「え、もう仲なおりしたの？…女湯のほうまで聞こえてきてさ」

見るからにおしゃべりが好きそうなおばさんだった。そのとなりには、80歳は確実に超えているおばあちゃんも座っていて、私に向かって「ふふふ」と微笑みかけている。

「じゃあ、最初から仲よかったんだよ」

彼らの話を聞いていると、刺青の人はどうやらここによく来る人らしい。家族が喧嘩に巻き込まれているんじゃないかと、女湯で心配していたのだけど、「あれに言い返せるのは、うちの人じゃない」と結論したという。クリーンセンター入浴施設、いつ来てもおもしろい場所である。

その夜、星が綺麗だった。思わず「ほしめっちゃきれい」と、車の窓から呟いた。左の写真はシャッタースピードを 1.4 秒にして携帯で撮ったもの。写っているのは隣の家。

《夏の家　冬の家》計画改め《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.4**

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

発電所の制作二日目

翌朝、車内でもぞもぞと体を起こし、顔を洗うためコンビニに向かおうと靴下を履いていたら、正面から見知らぬ車が近づいてきた。

現場の前の砂利道は行き止まりで、だからこそ私はここで車中泊ができる(道との間に段差があり、自分の敷地に車を入れることができないのだ。いずれはその工事もしたいが、あとまわしにしている。なぜなら車が全然こないから)のだが、初めて他の車が入ってきた。とはいえまだ二回しか来ていないのだけど。

窓を開けて「どうも」と挨拶したら、感じのよさげなおじちゃんが運転席から「工事する？」と聞いてきた。助手席にはおばちゃんも座っている。

「はい、今日やろうと思ってます。もしかして、この畑の方ですか？」

おじちゃんは「そうです」と答えた。私の現場は道の突き当たりの右側にあるのだが、左側には同じくらいの広さの畑があり、この二人はそこの持ち主らしい。いずれ会うだろうなとは思っていたけど、会えた。おじちゃんは、私の車のせいで自分の敷地に車を入れられないようだった。

「すいません、いったん出します」「そうね、一旦出てくれる？いいよいいよ、お互い様だから」

私は車を出して、そのままコンビニへ行き、顔を洗ってフルーツサンドを買って駐車場で食べ、現場に戻ってきてから、おばちゃんとおじちゃんに改めて「最近ここを買った、村上といいます」と挨拶した。二人は一瞬かたまってから、「え、おたくがここ買ったの？」とおじちゃんが言った。

「住まいは東京なんですけど、ここに通っていろいろやります」

おじちゃんはにっこりして、(おばちゃんもふふふ、と笑って)「そう。わたしらはここで畑やってて、週に一回くらい来るだけだから」と言った。「そうですか。よろしくお願いします」と、私は作業へ戻った。挨拶ができてよかった。

図 54

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

まずは昨日の続きで、四つの穴を掘って基礎をつくる。スコップで掘り、そこに羽子板付沓石を入れて、「直角三角形の斜辺の二乗は他の二辺の二乗の和に等しい」という、むかし学校で習った法則を駆使して距離を割り出し、四つの基礎を埋めた(図 54)。

掘ってみて感じたのは、雑草の根があるところにはミミズやムカデやハサミムシなど虫が多いということ。根は地中に空間を生み、虫たちのいわば家として機能していると思われる。

図 55

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

出来上がった基礎の上に、2×4 材を縦に四本、ボルト(径 10mm、長さ 60mm)で固定する(左の写真)。そうしてできた柱と柱の間に、アトリエから持ってきた角材をひたすらビスで固定して、壁を作る(図 55)。

作業の途中、私が殺してしまったらしいミミズの「切れはし」を二回と、元気なムカデを一回見た。ムカデは噛まれると痛いので、スコップですくって下の水路にポイした。それと、カブトムシだかカナブンだかわからないが白くてデカくて体を丸めたなにかの幼虫が出てきたので、そいつも枯れ草の山の中(仲間がたくさんいることが、前回の現場作業の時に確認されている)に移動させた。

しかし、私が感知できていない虫はまだまだ無数にいるはずだ。きっと私は無自覚にめちゃくちゃな殺戮をしていることだろう。目に留まった者だけを助けるということが、はたしてよいことなのかどうかはわからない。殺したり、見つけたやつを無視して作業を続けることができれば楽なのだが、見つけてしまった以上放っておけなくて、いちいち遠くに逃してしまう。

それから、写真を撮り忘れてしまったのだけど、大きなカマキリが、作業をしているあいだずっとブルーシートの上にいた。こいつは昨日も同じ時間帯に、同じところにいた。カマキリというものは、一日のルーティンが決まっている虫なのかもしれない。

図 56

途中、隣家の猫が、車の中に置きっぱなしにしていた私の黒糖かりんとうの袋を漁っているのを遠くから目撃し、サザエさんみたいに走って追い払った。向かいの畑で作業していた夫婦はいつのまにか帰っていた。

合板で一気に壁が貼れたら楽なのだが、角材を一本一本打ち付けているうえ、虫をいちいち逃しているので、丸一日やっても壁が終わらず、3面ほど完成した時点で暗くなってしまった(図 56)。

この日も車中泊をすることにし、風呂へ向かった。「クリーンセンター入浴施設」ではなく、東金市の「松の湯」という、車で 20 分ほどの初めての銭湯へ。

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

松の湯

脱衣所は薄暗く、番台の上の照明しかついていない。他に男性客が一人、着替えていたがやがて帰っていった。

こんな銭湯は久しぶりで、ひとり心の中で盛り上がった。これまでに《移住を生活する》を通して、数えきれないくらいの銭湯や温泉に入ってきたけれど、ここまで細々と営業を続けている、昭和最後の灯火みたいな銭湯はあまり見ない。

耳が遠い番台のおじちゃんに 480 円を払って風呂場へ入る。女湯の電気は消えていた。男湯も、蛍光灯が一本ついているのみ。

壁画は赤富士。壁にはトタン板と柄の長いペンキ用ローラーが立てかけられている。シャワーが壊れていて、カランの熱い湯と冷たい水を桶で混ぜて適温をつくり、体を流す。浴槽に桶を入れてはだめ、浴槽からお湯をすくってはだめ、などいろいろな注意事項が書かれた木の板が壁に打ち付けてある。

風呂に入ると、ここからはほとんど真っ暗に見える脱衣所のほうから、相撲実況の声が聞こえてくる。聞こえる音はそれだけで、私の手から落ちるわずかな水滴の音までくっきりと耳に入ってくるほど静か。なんだか、現実世界ではないような雰囲気がある。遠い未来に再現された「セントウ」というものを VR で体験しているみたいな。リアリティがないというか、不思議な時間だった。

現場からはちょっと遠いけれど、20 円でドライヤーも使えるし、湯加減も最高だったのでまた来たい。

蕎麦の店「東京庵」

風呂の後、東京庵という蕎麦屋へ行った。野菜天重セット 1500 円。安いしうまい。山武市の「まんまや」(前号を参照)も良い店だったことを思うと、千葉の飲食店、かなりいいのではないか？

天井のスピーカーからはジャズが、棚に置かれたでかいオルゴールからは、けっこうなボリュームでクリスマスソングが流れており、たいへん騒がしい。だがよく見るとオルゴールではなく、窓枠を模したフレームに、クリスマスベルが十二個ぶら下がっていて、それが順番に叩いて鳴らされることによって音色を奏でる、電動のなにかだった。

店員がそのなにかを指して、

「これ、うるさくないすか？うるさくないすか？…まだクリスマスじゃないすけど」

と言っていた。さわがしいけど、いい店だった。お腹いっぱいになるまで食べちゃった。

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

発電所の制作三日目

現場に戻り、昨日と同じように車内にこしらえた寝床(左の写真)で眠り、翌朝から作業再開。

まず昨日の続きで壁の残りを作って、それからコメリに行ってガルバリウム鋼板の波板を買ってきて、それでドアを作り、塗装合板の屋根をかけ、屋根の上にソーラーパネルを設置した(図 57)。ここまで一気に、三時間でやった。それから倉庫の中に、バッテリーや草刈機やスコップなどの工具を収納し、二日半かかった倉庫兼発電所がようやく完成した(図 58)。

図 57

《夏の家　冬の家》計画改め《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.4**

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

図 58　完成した倉庫兼発電所

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

＜とつぜんのコラムコーナー＞

発電所を完成させた数日後、友人のアーティストから電話がかかってきた。前回の報告書を読み、すこし話したくなったという。それだけでもうれしい出来事だったが、友人は私の活動に引きつけて、興味深いことを教えてくれ、思いがけず話が盛り上がった。

1920 年から 30 年にかけ、革命下のメキシコで勃興した「メキシコ壁画運動」という、有名な絵画運動がある。

それは「革命の意義やメキシコ人としてのアイデンティティーを民衆に伝えることが目的であり、そのため個人所有でなく誰でもいつでも見ることのできる壁画が主な媒体に選ばれた。主な作家にディエゴ・リベラ、ダビッド・アルファロ・シケイロス、ホセ・クレメンテ・オロスコ（José Clemente Orozco）らがいる」（Wikipedia より）のだが、このシケイロスという画家が、「シケイロス実験工房」という、絵画技法および素材研究の場所を開いていたという。そしてその場所は、友人いわく「反体制派のアジトみたいな感じになっていた」らしい。

この、素材や技法を研究するための工房が、反体制派と結びついていたという事実は、非常に象徴的なことである。絵画の顔料を調合したり、壁面に定着させるための技法をあれこれ試したりする行為は、一見すると政治的な運動とは無縁そうな、むしろ部屋に引きこもって外の世界を遮断しているような、保守的な印象を受けてしまうけれど、逆なのである。それはシームレスにつながることなのだ。

ここに絵画があるとする。そこにはなんらかの描画材や支持体が使われている。それは水彩画だったり、油画だったり、テンペラ画だったりするだろう。その材料や技法を研究するということは、そこで使われている描画材や支持体の「前提を遡ること」なのである。これは必然的に、体制に対してラディカルな立場を取ることであり、非常に政治的な活動となる。

これは絵画に限らない。「DIY」も同様である。この言葉はこんにちでは、すこし牧歌的な、あるいは余暇的なニュアンスの、日曜日にお父さんが自分で棚を作る光景などが浮かぶ言葉になってしまっているが、その真髄は、自分たちをとりまいている既存のシステムへの疑いと結びついている。非常に政治的な手つきなのだ。

この話は、私がこのプロジェクトを続ける動機と直結している。私は、一般的に使われている暖房と冷房への疑いから「村上勉強堂」を始めたのだが、それはすぐに「暖房を使うための部屋はどのような素材でつくるべきなのか」という問いに発展し、「その場の土で作る」という方法に落ち着いた。

私は、自分が享受する「快適さ」について理解し、「納得したかった」のである。暖房や冷房や壁について、「どのような仕組みで成り立っているのかわからないものは使いたくない」と思っている。ごく個人的な感情ではあるのだが、シケイロスのことを思えば、同時に政治的な運動でもあるのだ。我々はもっと積極的に、Do it yourself したほうがよい。

もう一点、すこし話が飛ぶが、最近読んで衝撃を受けた『食べものから学ぶ世界史』（岩波ジュニア新書）という本がある。小麦や米などの「食べ物」が、産業革命を通じて、いかに「商品」になっていったのか、その歴史を解説している本なのだが、例えば「胃袋を満たすという目的のためには、穀物よりもイモの方が、早くラクに大きなデンプンの塊を育てることができるし、食べる時も、洗って焼くか蒸すかすれば食べられるので簡単である。だが穀物は、長い年月をかけて小さな種子を栽培し、脱穀して穂から粒を外して固い殻や異物を取り除いて、米なら水に浸して炊飯したり、小麦なら製粉して発酵させて焼いたりと、食べるのに時間がかかる。なのになぜ、イモではなく穀物が主食として定着しているのか」という問いがある。

それは「支配者にとって都合がよかったから」だと、この本は答えている。地中で育つイモよりも、地表で育つ穀物の方が、一見して収穫量を確認できる。粒が小さく、一粒の誤差がすくないので、徴税する時も便利である。また殻に覆われているので、保存や輸送にも適している。

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

この小麦の単一栽培に対応できたのは大農場主だけで、小さな農家は都市での労働を強いられた(そこに「胃袋」という市場が生まれた)。だがこの農場主たちも、収穫量は多いが害虫の影響を受けやすい小麦の栽培を余儀なくされ、工業製品である農薬を毎年購入しなければ農業を続けることができなくなった。

このように、「主食」と呼ばれている食料ですら、我々の胃袋が選んだというより、政治経済に組み込まれた「政治的作物」なのである。

(この事実を、歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリは、別の側面から「ホモ・サピエンスが植物種(小麦と稲)に家畜化された」と表現している。「現在地球上で最も繁栄している生物は人類ではなく、小麦である。小麦自身が何もしなくても、人間が勝手に育てて世話をしてくれる。まさに人類は小麦の奴隷になった」とハラリは言う。

ちなみに、まったくもって蛇足だが、名古屋には「小麦の奴隷」という、ハラリの言葉から名付けられたパン屋があるらしい。商魂たくましすぎる)

これを先ほどの話にひきつけるならば、例えばスーパーで買ったかぼちゃの種やジャガイモを庭に植えて自分で育てたりする行為は、本人の意志とは無関係に、反体制という側面を持ってしまう。

絵画も、家も、食べ物も、私たちが普段享受しているものはすべて、さまざまなレベルで政治的な影響を受けた結果、現在のかたちに至っている。ということは、絵の材料を研究すること、自分で家を作ること、自分で畑を耕すことなど、「DIY 的なもの」はすべて、その政治的な前提を遡ることであり、私たちが行うスコップのひと掻き、クギのひと打ちは、抵抗への意志なのである。このことを忘れないようにしたい。

おわりに　テストピースの脱枠

図 59

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

12 月 9 日、冒頭で説明した四種のテストピースを脱枠した(図 59)。左から、

1　現場土のみ

2　現場土:砂(中目または荒目):骨材(5～20mm)を、1:1:0.4

3　2に加え、消石灰5%

4　2に加え、消石灰10%

である。白みが増しているのがわかる。この色違いのころころブロックがあまりにもかわいいので、いろいろと構成をしてしまった(図 60)。

図 60

特に、土だけで作ったブロックがお気に入りだった。現場から持ってきた土を、木で突き固めただけでここまでの固まりになるのかと思った。だが「土」という物体は存在しない。これは遠い昔、落ち葉だったものや、岩石が砕けたものや、動物の体だったものが、長い年月をかけて分解され、蓄積した結晶なのだ。その結晶体が、さらに結晶化してここにある。前回の報告で時間の話をしたが、この 10cm の立方体が内包している時間は、はたしてどれほどのものだろうか。考えただけで星空を眺めているような気持ちになる。

そんなことを思いながら、さすったり捻ったり投げたりしていたら、ある瞬間にぼろりと崩れてしまった(図 61)。

《夏の家　冬の家》計画改め《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.4**

大地讃頌、四種のテストピース、発電所制作と風呂場の仲なおり、前提を遡ること

作成者:村上 慧

2022 年 12 月 16 日

図 61

図 62

図 63

このブロックは三層構造でミルフィーユみたいになっているのだが、その一層が剥離してしまった。やはり砂や石灰を混ぜてないぶん、結合が甘いらしい。

剥がれた一層を持ってみると、小さな大地を支えているような、まるでギリシャ神話のアトラスのような気持ちになった。この上に小さな木とか、小さな家とか、小さな人とかを載せて作品化したい。今度、やってみよう。

崩れついでに、他のブロックもひととおりいじってみて、強度を確認した(図 63)。

やはり消石灰を 10%混ぜた 4 番のブロックが一番強かった(一番右)。《村上勉強堂》では、この配合で版築をやることに決めた。

本報告書の第二号から数えて、もう五ヶ月ほどテストピースを作り続けてきたが、ついに配合が決まった。ここからは、現場での版築作業となる。

本報告書に着手したのは 12 月 8 日である。またしても、報告書作成に一週間以上かかってしまった。もうすこし省エネでいきたいところだが、遅筆なので仕方がない。これは受け入れるしかない。

次回の報告では、《勉強堂》の設計図と、可能なら現場での骨組制作をレポートしたい。

文責:村上慧